



親子愛



「青少年育成センターだより第102号～それがお母さんでした～」で、“長崎に原爆が投下された時、自分も怪我をしながらも、子どもを命がけて助け、その無理な行動により、息絶えた母親の話”を紹介しました。(これまでの「青少年育成センター」は、防府市のホームページに載せています。ぜひ読んでみてください) このお母さんの行動は、まさに無償の愛による行動でしょう。母親の愛、親の愛がどれだけ尊いのかを考えさせられる話でした。

前号176号で、石川県能登半島地震での助け合う被災者同士の心温まる行動、日本人の美德として「惻隱の情」があるのだということを記載しました。今号では、被災地での出来事から「親子愛」について考えてみましょう。

『俺は母ちゃん守るし、お前はそっち行って生きろ』って均さんが私（の背中）をポンと押してくれたんじゃないかと思う」。押し潰された家で九死に一生を得た広田寿子さん（63）は涙をこぼした。多くの家屋が倒壊した石川県珠洲市の宝立町鶴飼の自宅で、夫の均さん（65）と義母の咲子さん（93）を亡くした。翌日に子どもや孫たち総勢15人が集まるため、机を3つ並べておせち料理やすき焼きの用意を終え、こたつでホッとした時に揺れが来た。均さんは隣室にいた咲子さんの元へ。そこへ家が崩れ、気づくと真っ暗だった。寿子さんはがれきをドンドンたたき「助けて！ここにおります、広田です」と何度も叫んだ。暗闇の向こうに小さな光が見えた。小さな穴を近所の人たちがどんどん広げ、一時間もしないうちに引っ張り出してくれた。だが均さんと咲子さんがいない。大声で叫んでも返事がない。翌朝、均さんもかつて務めた消防団の後輩たちが駆けつけ、手でがれきを取り除いていった。声が飛んだ。「均さん、おばあちゃんをかぼとるよ（かばっているよ）！」。咲子さんに覆いかぶさり、その背中を太いはりが直撃していた。「握りこぶし、ぎゅーってして。苦しんだ顔ではなかったのが救い」と寿子さんは声を震わせる。・・・ 2024. 1. 16 毎日新聞

「俺は母ちゃん守るし、お前はそっち行って生きろ」という言葉には、本当に胸が熱くさせられました。

隣室の母親のところに駆けつけ、母親に覆いかぶさり、かばった均さんがとった行動は、「ただ母親を救いたい」という思いだったのだと思います。そこに壮絶な親子愛を感じます。「親の愛は海より深く山より高い」と言われますが、親の子どもへの愛も、また子どもの親への愛も無償の愛なのだと思います。まさに均さんの行動は、無償の愛による行動だったのでしょう。

今テレビや新聞などで、被災地の様子が報道されています。被災された方が、助け合って生きていこうという姿、そして、それを支援する人たち（ボランティアの人たちも含む）も自分のことを顧みず、被災者を支援しておられる姿、本当に心が熱くなります。遠くにいる私たちに何ができるかについて、子どもと一緒に考えてみましょう。